

『涅槃経』における無我と私の教説

I、問題提起 「無常・無我」を原初の教説とする仏教において、「常楽我浄」を説く『涅槃経』は、異端の経典であるかのごとくである。その矛盾は一体何に起因するのか。「経典とは何か」という視点から膨大な『涅槃経』の基本構造と思想表現を明らかにしたい。

II、六卷『泥洹経』と大本『涅槃経』の違い 六卷『泥洹経』が大本『涅槃経』の前半十卷に相当することはよく知られている。そこで両者を丁寧に比較検討してみると、文脈上極めて重要な場面で、『泥洹経』には存在しないいくつかの教説があることに気がつく。「純陀品の二種施食(北本、T12. 372a-b)」「哀歎品の秘密蔵(同 376c)」「哀歎品の伊字の三点(同)」「四相品の伊字の三点(同 387b)」「菩薩品の本有今無偈(同 422c)」などである。これらはいずれも、『泥洹経』から展開した部分と考えられ、経の文脈を明確にするとともに思想的な内容を高度に表現し、大本の中分、後分を演繹するような意味を持っている。この点を大本の構造に随って考えてみたい。

III、その違いに基づく大本『涅槃経』の構造と思想展開 大本『涅槃経』は、初分十卷、中分十卷、後分二十卷の都合三回に分けて曇無讖によって翻訳された。本来六卷『泥洹経』として一応完結していた『涅槃経』が、大本四〇巻を形成した思想的理由は一体何か。この点を解く鍵は上述した両経のズレにある。まず「純陀品二種施食」は、「ブツダの涅槃」を通して如来常住を立論する喩説であり、これをきっかけに哀歎品では、大般涅槃を定義して「解脱・如来身・摩訶般若」の三の円融であるとし、「伊字の三点」として象徴的に説く。本経のテーマである「大般涅槃」は、これまでの涅槃の概念とは全く異なり、阿含・大乘仏教全体を総括するような意図を持っているのである。それ故これを「秘密蔵」と称するのである。更に「ブツダの涅槃」をきっかけに開かれた如来の不変性は、無常(=八相成道)と常住の不二として「如来性」と定義され、この点が一切法の不二(般若波羅蜜の内容)と重なって、後半では「衆生仏性」と展開する。最後の「本有今無偈」は有無の執着をきっかけに如来性・仏性を開くものとして中分・後分にも説かれている。

IV、仏説に関する『涅槃経』の結論 このように『涅槃経』は、阿含・大乘の全ての仏説を総括する意図を持った経典である。迦葉品ではこの根拠を「如来の知諸根力」と説く。衆生の執着を破るための如来の教説は、随自意(その場に依じて内心を説く)・随他意(相手の論理に随いそれを破す)・随自他意(世間の真理に順じて説く)の別があり、「有を無と説き、無を有と説く」こともあるとする。要するに『涅槃経』は、人間の分別を破ることに全体的な意図があると言え、膨大に展開しつつも原点に回帰するものと言えよう。